

日本旧石器学会

ニュースレター 第16号

NEWS LETTER No.16

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

第3回アジア旧石器協会韓国大会

佐藤宏之 (渉外委員長・アジア旧石器協会執行委員)

第3回アジア旧石器協会 Asian Palaeolithic Association(以下APA 略称)が、2011年10月10日(日)～16日(土)の7日間、韓国・公州にて開催された。APAは、ロシア・中国・韓国・日本の各国旧石器学会(相当学会)の連合組織として、2008年6月ロシア・アルタイで第1回APA会議が開催された。翌2009年10月には、中国・北京で第2回APA会議が開かれ、今回は3回目の年次会議に当たる。

今回の第3回APA会議には、日本から小野昭会長、麻柄一志副会長、吉川耕太郎・野口淳・諏訪間順・鈴木美保・出穂雅実・阿子島香・島田和高の各会員と筆者の10人の代表が招待され、研究発表等に参加した。その他に、佐川正敏・鹿又喜隆・長井謙治会員が参加した。

会場が公州とソウルから離れていたこともあり、韓国側の出迎への便を考えて、日本人参加者は10日(日)午後1時に、ソウル・インチョン空港に集合した。明大で学位を取得し、その後筆者のところでPDを勤めた金正培さんが出迎えてくれ、高速バスにて大田へ。大田市内で大会の公用車に分乗し、まず公州・石荘里博物館に向かう。夜6時を回っていたが、石荘里博物館でregistrationを行い、大会グッズをいただいた後、公州市内のホテルに投宿した。直ぐにホテル脇の食堂で、大会参加者一同と夕食をとり、ホテルにもどってから直ちにAPAの執行会議を開いて、翌日の次期会長選挙の打ち合わせと来年のAPA日本大会のPRを行った。

11日(月)は大会第一日目で、ホテルから大会公用車に分乗して、会場の公州大学校へ。9時にopen ceremonyが開始された。伝統的な口承芸で幕を開け、公州市や公州大学校等のwelcome speechが続き、主催者側の熱意が感じられる式典であった。全体の記念写真の後、次期APA会長選挙が各

国代表3名による投票で行われ、その結果、李隆助氏(韓国)が次期会長に選出された。初代会長のDerevianko氏(ロシア)は名誉会長に推戴され、副会長には、高星(中国)・小野昭・Drozdov(ロシア)・Ki-dong Baeの4氏が、執行委員には、日本から加藤真二氏と筆者が、中国からは王幼平・石金鳴両氏が、ロシアからはG. MedvedevとShunkovの両氏が、韓国からはHyeong-woo LeeとHeon-jong Leeの両氏が選ばれた。任期は2年である。開会式典後、10時20分から午後6時まで、2つのセッションが行われた。以下全ての発表について触れることは出来ないため、筆者の関心を引いたテーマについて、適宜紹介する。敬称は略したい。期間中ポスター・セッションも行われたが、省略する。



石荘里博物館

セッション1では、マックス・プランク研究所のペーボ等による昨年的人类学界最大の発見と言われるデニソワ人を中心としたDNAによる人類進化の展望が目をつけた。続いて行われた高星の仮説と並び、いよいよ東アジアにおける「多地域進化」説の活性化・具体化を象徴する発表であった。セッション最後のJinによる南中国におけるギガントピクテスとサピエンス共存の可能性は、妥当とすれば定説の大幅な変更を促すことになる。

午後のセッション2は、地域の最新成果の発表である。インドのMishraは、インドネシアのLarge flake Acheulian等を根拠としてモヴィウス・ラインを否定する従来の主張を再論したが、クリーバーを主とするLFAをAcheulianと見なせるのであろうか。Forestierの東南アジア全域に分布するホアビニアンという発表とともに、型式学分析の重要性を再確認させられた。O'connorは、東チモールの発掘成果を元に、外洋性魚類資源の開発がスフルへの初期人類拡散を促したとする注目すべき発表を行った。

本日の夕食は、Welcome Banquetとして、何と石荘里博物館前の庭で豪華なパーティーが開かれた。これには一同驚きの一語であった。もちろんホテルにもどってからの2次会も、毎晩行われたことは付言するまでもないだろう。

大会2日目の12日(火)の午前中はセッション3が行われ、昨日に引き続き各地の成果発表であった。Song等による中国最古段階の細石刃石器群(24ka以前)を検出したShizitan 柿子潭遺跡では、残存デンブ分析によってケルクスやミレット痕跡を確認した石皿類や貝・駝鳥卵殻製ビーズ等を多量に出土しており、細石刃製ドリルの存在と合わせて興味深い。午後は、Mid-symposium excursionが行われ、石荘里博物館で発掘中の第2地点の調査現地を見学した。地表下数mに礫が面的に出土しており、その中に礫とは石材を異にする石器が多く存在している出土状態はかなり特異で、おそらくはcolluvial, alluvial, fluvialの3者の堆積作用が複雑に介在している様相が看取できた。続いて、武寧王陵に行き、その後徒歩で開催中の大百濟祭典会場に向かう。1時間ほど見学した後、会場近くの食堂で夕食をとり、ホテルへ。

大会3日目の午前中は韓国旧石器学会の年次大

会が開かれたため、外国人参加者は、石荘里博物館で資料見学をした。実際に主要な石器を手にとって観察できたことはよかった。その後、国立公州博物館の展示を見学し、午後の最後のセッションに参加した。セッションの最後にボエダが登場し、遺伝人類学を否定した上で、中期/後期の移行は各地で異なることを主張した。セッション終了後総合討論が急遽行われ、小野会長のコメントを皮切りに黒曜石の問題が議論された後に、ハンドアックスの問題について、筆者等が議論を行った。夜のFarewell partyは、公州市長の招待で、鴨料理に舌鼓を打った。

翌14日(木)からの2日間は、東北部の江原道と南部の全羅南道の2つのコースに別れて、Post-symposium excursionが行われた。筆者は江原道コースに参加し、2日間にわたり、最近調査が活発に行われた江原道の洞窟遺跡や海岸部の遺跡を巡検した。充実した巡検資料が用意され、各地で出土資料を実見できる等よく配慮された巡検旅行であった。15日夜遅くにソウルに到着し、翌16日のフライトで帰国した。

APAも3回を数え、東アジアだけではなく、東南アジア・インド・ヨーロッパ等からも研究者が参加する国際会議として定着した感がある。来年の日本大会をより良いものにするための参考にもなった。末筆ではあるが、韓国大会を周到に準備され、行き届いたもてなしをしていただいた大会実行委員会に深甚の謝意を呈したい。同時に、参加された会員各位にも謝意を呈する。大変楽しい、そして印象深い大会であった。



石荘里遺跡調査地点

第4回アジア旧石器協会 (APA) 日本大会のお知らせ

第4回アジア旧石器協会日本大会実行委員会

先の学会総会およびニュースレター誌上でお知らせしたように、2011年度には、2010年度の韓国大会につづき、アジア旧石器協会の第4回大会が日本で開催されます。第4回APA日本大会「アジアにおける近年の旧石器時代研究の進展」は、国立科学博物館との共催で、シンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」とのDual Symposiaとして6月25日(土)～30日(木)にかけて開催されます。最新の情報は、日本旧石器学会・国立科学博物館のホームページでご確認ください。

なお、日本旧石器学会の2011年度総会は、シンポジウム日程の初日、6月25日(土)に行われます。あわせて、ポール・メラース教授(ケンブリッジ大学)とアナトリー・デレヴィアンコ教授(ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌学研究所)による一般講演(日本語通訳あり)も予定されています。総会・講演会の詳細についてはおってご案内します。

例年の日本旧石器学会講演会・研究発表・ポスターセッション・シンポジウムの開催および同予稿集の刊行は2011年度についてはありません。なお、会誌「旧石器研究」は例年通りの刊行です。口頭発表・ポスターセッションを希望する会員は、以下のシンポジウム開催要項を熟読の上、APAでの口頭発表あるいはポスターセッションとして参加登録をお願いします。いずれの場合でも、発表に使用する言語は英語となりますが、APAの発表要旨については、別途日本語訳の冊子が刊行される予定です。

今回、口頭あるいはポスターによる発表の有無にかかわらず、APAおよび/あるいはシンポジウム「現代人的行動の出現と多様性」へ参加する場合には、会員でも事前の参加登録と登録料が必要となりますのでご注意ください。登録料のシステムについては、以下のシンポジウム開催要項を参照してください。

なお、APAに関するお問い合わせは、第4回APA日本大会実行委員会(鈴木美保事務局長: comet35mst@mail.hino-catv.ne.jp)までお願いします。会員の皆様にはご理解とご協力をお願いするとともに、多くの方々のご参加をお待ちしています。

Dual Symposia

第4回アジア旧石器協会 (APA) 日本大会

シンポジウム 旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性

於: 国立科学博物館

2011年6月25 - 30日

主催 国立科学博物館・日本旧石器学会

後援 日本考古学協会、日本第四紀学会、日本人類学会、INQUA Commission on Humans and the Biosphere

I. 概要

重要事項

参加登録・発表要旨原稿締め切り 2011年3月31日

会場・日程

国立科学博物館 講堂 <http://www.kahaku.go.jp/>

6月25日(土) 受付・日本旧石器学会総会・一般講演会・ウェルカムパーティー

26日(日) APA(口頭発表、ポスターセッション)、APA役員会

27日(月) 遺跡巡検・検討会(沼津市文化財センター)

28日(火) シンポジウム1日目(口頭発表)

29日(水) シンポジウム2日目(口頭発表、ポスターセッション)

30日(木) シンポジウム3日目(口頭発表)・フェアウェルパーティー

ウェブサイト

<http://www.kahaku.go.jp/english/event/2011/06sympo/> (英語)

<http://www.kahaku.go.jp/event/2011/06sympo/> (日本語)

公式言語 英語

登録、問い合わせ先

シンポジウム事務局 M & J インターナショナル

新川 順子 気付

〒241-0817 神奈川県横浜市旭区今宿1-35-17

FAX: 045-361-9681

Mail: junko_nikkawa@99.catv-yokohama.ne.jp

II. 第4回アジア旧石器協会日本大会 (APA)

2008年に韓国、中国、日本、ロシアの4カ国でアジア旧石器協会 (APA) が設立されました。2011年6月25・26日に第4回目の大会が日本の国立科学博物館にて開催されます。

テーマ 「アジアにおける近年の旧石器時代研究の進展」

小テーマ:

更新世の古環境と人類

行動戦略と石器製作技術

古生物学と古人類学の調査研究

現代人的行動の出現と多様性

日本大会 実行委員

委員長: 小野 昭 (明治大学)

事務局長: 鈴木美保 (明治大学)

実行委員: 阿子島 香 (東北大学)、出穂雅実 (首都大学東京)、海部陽介 (国立科学博物館)、加藤真二 (奈良文化財研究所)、佐藤宏之 (東京大学)、諏訪間 順 (小田原市)、野口 淳 (明治大学)、宮田栄二 (日本旧石器学会)

事務局: 門脇誠二 (名古屋大学)、山岡拓也 (首都大学東京)

III. シンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」

組織委員

海部陽介（国立科学博物館）、出穂雅実（首都大学東京）、
小野 昭（明治大学）、佐藤宏之（東京大学）、Ted
Goebel（テキサス A&M 大学）

趣旨

近年、“現代人的な行動”の起源とその内容が、人類進化をめぐる最重要の研究テーマの1つとなってきている。現在のところ、この問題について得られている知見の大部分は、ヨーロッパとアフリカにおける研究に基づいている (Mellers et al., 2007; Klein, 2009)。しかしながら最新の研究では、旧石器時代の現代人的行動は地域的に多様であったことが強く認識されるようになり、かつ“現代人的行動”とは何を指すのか、その定義そのものも議論の対象となっている (Henshilwood and Marean, 2003)。こうした中で、ヨーロッパ・アフリカ以外の地域における現代人的行動の証拠を例証・蓄積していくことが、ますます重要になってきた。

東部アジア地域（東ユーラシア）は、人類の拡散史において、サフル（オーストラリア・ニューギニア地域）、アメリカ大陸、さらに太平洋の島々への進出の足がかりとなった、広大な地域である。本シンポジウムの目的は、この重要な地域における証拠を集め統合することにある。わずかな試みを除けば（海部, 2005; Barker et al., 2007; Hubgood and Franklin, 2008; Norton and Jin, 2009）、当地域における現代人的行動に関する検討は、これまでほとんど行われてこなかった。しかしこの状況は、必ずしも当地域における証拠や研究が少ないことを反映しているのではなく、一つにはそうした研究に関心が払われていなかったこと、そしてもう一つは、こちらのほうがより大きな理由なのだが、英語圏と非英語圏の間にコミュニケーションの壁が存在することに原因がある。

我々は本シンポジウムが、東部アジア地域において何がわかかっていて何がわかかっていないのかを理解する場となり、さらに各地で将来におけるより効果的な調査研究が企図されるきっかけとなることを期待している。シンポジウムで対象とする地域は、シベリア、東アジア、東南アジア、インド、オーストラリアで、主要なテーマは以下の通りである。

後期更新世の古環境

現生人類拡散についての化石形態学・遺伝学的証拠

現代人的行動の考古学的証拠

現代人的行動の定義

プログラム

1 日目

基調報告：旧石器時代の現代人的行動

セッション1：後期更新世のアジアの古環境

セッション2：拡散と移住—人骨と遺伝学的証拠

討論

2 日目

セッション3：北・東アジアの現代人的行動

ポスターセッション

討論

3 日目

セッション4：南・東南アジアの現代人的行動

セッション5：オーストラリア地域における現代人的行動

討論

IV. 予稿集要項

発表形式

APA 大会

APA 日本大会では口頭発表、ポスター発表、両方の発表者を募集いたします。口頭発表は15分以内です。発表要旨に口頭発表かポスター発表のどちらを希望するかを明記してください。発表要旨は大会実行委員（委員長：小野 昭）が査読し、口頭発表の希望が多数の場合はポスター発表への変更をお願いします。なお、最大で16本の口頭発表を予定しています。

現代人的行動

口頭発表は約40名の招待講演者が行います。ポスター発表、また会場での聴講・討論への参加を歓迎します。

ポスター仕様

ポスターはAPA日本大会、シンポジウムの両期間を通して掲示されます。ポスターは縦120cm、横84cm以内の大きさでお願いします。固定のための道具はこちらで準備いたします。

発表要旨の提出について

発表要旨は下記の指示に従って、MS-Wordファイルで下記のアドレスに2011年3月31日までにe-mailで送ってください。

新川 順子宛（シンポジウム事務局）

junko_nikkawa@99.catv-yokohama.ne.jp

- 登録用紙にて会議への参加申し込みを済ませていない人の発表要旨は受け付けられません。
- 次のアドレス <http://www.kahaku.go.jp/english/event/2011/06sympo/> で取得できるテンプレートに従って、MS-Wordで要旨を作成してください。テンプレートのフォーマットは変更しないでください。提出された要旨はそれ以上の編集はせずに直接印刷します。
- 発表要旨はタイトルや名前を含めてA4サイズの用紙1枚以内です。
- 発表要旨は英語でタイトル、名前、所属も入れてください。図版、表は1枚以内に収まるように直接張り込んでください。
- 発表要旨の最後に提出する要旨はAPAの口頭発表用かポスター発表用か、現生人類の行動シンポジウムのポスター発表用かを明記してください。

V. 遺跡巡検・検討会

6月27日(月)に日帰りで遺跡巡検を行います。場所は富士山麓、沼津、愛鷹方面を予定。参加料金は1万円(交通費、昼食、夕食込み)です。

VI. 登録

登録用紙を記入して、シンポジウム事務局へ2011年3月31日までにe-mailにて送付してください。(junko_nikkawa@99.catv-yokohama.ne.jp)

awa@99.catv-yokohama.ne.jp).

参加者は必ず登録が必要です。登録用紙は以下のウェブサイトから取得することができます。(http://www.kahaku.go.jp/english/event/2011/06sympo/)

聴講、および討論への参加のみを希望の場合、日本語の登録用紙でも登録できます。

日本語登録用紙は日本旧石器学会ホームページから取得することができます。(http://www.soc.nii.ac.jp/jpra/index.htm)

登録料

登録料の支払いは 現金でお願いします。クレジットカードは受け付けません。

APA 日本大会のみ (25 / 26 日)

5,000 円 *会議グッズ (名札、予稿集等)、ウェルカムパーティー、26 日昼食

シンポジウム現代人的行動+ APA 日本大会 (全日程)

15,000 円 *会議グッズ、ウェルカムパーティー(25 日)、フェアウェルパーティー (30 日) 昼食と会議中のお茶 (26・28～30 日)

シンポジウム現代人的行動の参加者は APA 日本大会に参加しなくてもこの値段です。

登録受付

受付場所は国立科学博物館の 1 階に設置します。受付で会議グッズ、プログラム、発表要旨、名札、遺跡見学旅行チケットなどを受け取ってください。会場に入場するには名札着用が必要です。

受付時間

6 月 25 日 (土) 10:00 - 17:00
6 月 26 日 (日) 8:00 - 17:00
6 月 27 日 (月) 終日閉鎖
6 月 28 日 (火) 8:00 - 17:00
6 月 29 日 (水) 8:00 - 17:00
6 月 30 日 (木) 8:00 - 12:00

VII. 宿泊

宿泊場所は参加者ご自身で確保してください。下記のホテルでは、「シンポジウム参加者」である旨を伝えると、割引のサービスがあります。

ニュー伊豆ホテル

<http://www.izuhotel.co.jp/>

東金屋

<http://www.tougane-h.com/>

VIII. 会議・一般講演

・日本旧石器学会 2011 年度総会： 2011 年 6 月 25 日 (土)11:30 - 12:30

*総会の詳細については日本旧石器学会のお知らせを参照ください。

・一般講演 (日本語通訳あり)： 2011 年 6 月 25 日 (土) 13:30 - 17:00

ポール・メラーズ教授 (ケンブリッジ大学)

アナトリー・デレヴィアンコ教授 (ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌学研究所)

フォーラム 「世界のなかの神子柴遺跡～氷河時代狩猟民の世界～」

2010 年 8 月 1 日、長野県伊那市創造館において、日本旧石器学会、伊那市創造館、上伊那考古学会主催、明治大学黒耀石研究センター後援のフォーラム「世界のなかの神子柴遺跡～氷河時代狩猟民の世界～」が開催された。学会では旧石器時代(含草創期)の周知を目的とし、また重要文化財の「神子柴遺跡出土品」全点を常設展示する伊那市創造館の 2010 年オープンに合せたフォーラムとなった。なお、その全点の常設公開は、館のオープンにより初めて実現し、パールの包まれた全貌が明らかになった。

パネリストは、小野昭会長と春成秀爾さん (国立歴史民俗博物館名誉教授)、司会は広報委員会の堤隆が務めた。参加者は 120 名であった。神子柴石器群は同館 2 階に展示公開されており、参加者は事前にその全体像を把握できた。

フォーラムではまず、神子柴の概要が紹介され、続いて、1958 年の神子柴発見当時の衝撃をリアルタイムで味わった春成さんが、神子柴遺跡がたどってきた研究の経過について話題提供された。

次に、神子柴遺跡の石器についての話題となり、尖頭器や石斧などを含む石器群の全体像を春成さんと堤で取りあげた。また、明治大学黒耀石研究センター長を兼ねる小野会長には、黒耀石および石材資源研究の意義や、神子柴の時代を含めた氷期の自然環境について、触れていただいた。

神子柴遺跡の性格については、かねてよりデポ説・住居説・祭祀説などが出され、論争となっていることは周知である。報告書作成にかかわった堤は、交換の拠点としてデポ説を支持するが、春成さんは 6 人程度の狩人の一時的な拠点であり、石槍・石斧を保持したまま不慮の事故により亡くなったのが神子柴でないかと独自の解釈を披露された。

小野会長は、反証可能な科学的議論をすべき立場を堅持し、北米のアゲイト・ベイسن遺跡の大型尖頭器の使用例なども紹介して、環北太平洋地域をめぐる尖頭器の在り方の中で、もう一度神子柴を見直してみる必要性があることを説いた。

神子柴遺跡をめぐる問題は果てしなく広がり、さらに議論の深化が必要であることが痛感された。



神子柴フォーラムの様子

小学生を対象とした旧石器時代教室の開催

小学校教科書の旧石器時代の記述消失が問題となっているが、今回その取り組みの一環として、小学生に旧石器時代の事を少しでも理解してもらおうと、フォーラムに先立つ午前、小学校5・6年生を対象にした旧石器時代教室を実施した。夏休みとなった伊那・木曾地域の子供たち24人の参加があった。

まず小野会長から旧石器時代の概要と黒曜石とは何かといった解説があり、子供たちは真剣に耳を傾け、続いて石器作り体験となった。

石器作りには白滝産黒曜石と天竜川河床礫のハンマーを用い、ケガがないようゴーグルと軍手を付け、原石から剥片を剥離し、ナイフに加工した。上伊那考古学会から宮脇正実・小平和夫さん、長野県考古学会から田中洋二郎さん、伊那市創造館の濱慎一さん、学会からは堤が石器作り指導にあたった。

最後は作ったナイフで実際に肉を切ってみて、それをうどんに入れて食べた。黒曜石のナイフの切れ味に驚いた子供らの顔が印象的であった。(広報委員長 堤 隆)



石器づくりに取り組む子供たち



中・四国石器文化談話会 質疑・討論の様子

第27回

中・四国旧石器文化談話会報告

2010年10月2日(土)・10月3日(日)の両日、徳島県立埋蔵文化財総合センターにおいて、第27回 中・四国旧石器文化談話会が開催された。

会のテーマは、第21回鳥取県開催から継続的なテーマとなっている、開催各県の旧石器文化の様相および従来からの旧石器資料も網羅し、再検討を加えるという趣旨を踏襲し、周辺地域との対比とともに地域の様相・特色を見出そうとするものである。

本会は、中・四国地域における研究を主体とするものであるが、中・四国地域はもとより、東北から九州にかけて50名近くの研究者が参加した。また今回、公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターの企画による旧石器時代の展示・講演会も併催された関係で、考古学ファン的一般の方々にも30名ほど参加をいただいた結果、両日とも70名を超える盛況となった。

両日のプログラムは、以下のとおりである。

第27回 中・四国旧石器文化談話会—徳島県とその周辺の旧石器時代の様相—

主催：公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター、中・四国旧石器文化談話会

日程：2010年10月2日(土) 13:00～16:30

2010年10月3日(日) 9:30～12:00

会場：徳島県立埋蔵文化財総合センター

内容

2010年10月2日(土)

1. 開会・開会挨拶：菅原康夫(公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター常任理事)、藤野次史(中・四国旧石器文化談話会代表)
2. 講演：「環日本海旧石器文化回廊と中国・四国地方の石器群」 安蒜政雄(明治大学)
3. 調査事例報告：「広島県三次・庄原地域の調査事例」 沖 憲明(広島県教育委員会)
4. 基調報告1：「東瀬戸内地域を中心とした後半期石器群の様相」 氏家敏之(公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター)
5. 基調報告2：「西瀬戸内地域を中心とした後半期石器群の様相」 池尻伸吾(財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター)

2010年10月3日(日)

6. 基調報告3：「中国山地および山陰地方の様相」 伊藤徳広(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)
7. 基調報告4：「近畿地方を中心とした後半期石器群の様相—大阪平野を中心に—」 絹川一徳(財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)
8. 資料見学
9. 質疑・討論
10. 閉会・閉会挨拶：藤野次史(中・四国旧石器文化談話会代表)

開会のあと、明治大学の安蒜政雄氏より、「環日本海旧石器文化回廊と中国・四国地方の石器群」のテーマで講演され、日本海をとりまく東アジアと日本列島の旧石器文化について最新研究をお話いただいた。

引き続き、調査事例報告・基調報告が行われ、中・四国地方の東・西瀬戸内地域の後半期石器群の様相および中国山地・山陰地方の様相に加え、近畿地方を中心とした後半期石器群の様相が報告され、各地域における使用石材・個別器種・石器組成の検討と、AT 降灰以降の石器群の変遷について各氏から編年案などが発表された。

質疑・討論では、徳島県の旧石器時代の様相解明を目的に、氏家氏の発表された編年案を軸に各地域とのクロスチェックと併せて、中・四国地域における編年・地域性をめぐる問題や AT 降灰以降の石器群のあり方など参加者から熱気あふれる議論がなされた。今回はナイフ形石器を中心とした後半期石器群の中にも、古段階の様相を示すものもあるのでは、という指摘もあった。

また、討論の中で、従来の板状素材を使用する瀬戸内地域に通有の伝統的な石器製作技法の問題や縦長剥片と横長剥片のナイフ形石器関係などが提議されたが、残念ながら時間的余裕がなく、次の機会へと引き継がれることとなった。

今回、瀬戸内地域は独立した空間でありつつ、隣接する周辺地域からの視点の議論が可能ということが改めて認識された。また、これまでの瀬戸内地域および瀬戸内技法を中心とした枠組みだけでなく、角錐状石器の出現契機と国府型ナイフ形石器の大型化との関係や九州地域・瀬戸内地域・近畿地域との連動を想定した石器群のあり方、さらに今峠型・花見山型ナイフ形石器との関係を含む、九州地方との関連を意識した新しい分析視点が提示され、意義深い会となった。

(原 芳伸)

第 24 回 東北日本の旧石器文化を語る会秋田大会報告

2010 年 12 月 18 日 (土)・19 日 (日) の両日、秋田考古学協会から共催、秋田市教育委員会と秋田県教育委員会から後援を得て、秋田市中央公民館において、第 24 回東北日本の旧石器文化を語る会が開催された。昨今、発掘調査遺跡数の減少から、とくに 2007 年第 21 回以降は立て続けに、一日を研究発表・ミニシンポジウムにあてたスタイルにしている。秋田での開催は 2001 年第 15 回以降、2 回目である。今回は一日目を研究発表とし、「秋田県域の後期旧石器時代前半期石器群／遺跡を考える」をテーマとして設定した。

今回の内容は以下の通り。

12 月 18 日 (土)

1. 開会・開会挨拶：柳田俊雄（東北日本の旧石器文化を語る会代表）
2. 研究発表 1：「中・高緯度地域における環境変遷とそれに伴う狩猟採集民適応行動の変化」出穂雅実（首都大学東京）
3. 研究発表 2：「秋田県後期旧石器時代前半期石器群の

概要」石川恵美子（由利本荘市本荘郷土資料館）

4. 研究発表 3：「地蔵田遺跡旧石器資料の再整理事業について」神田和彦（秋田市教育委員会）
 5. 研究発表 4：「秋田県の珪質頁岩石材環境」秦昭繁（山形県立うきたむ風土記の丘資料館）
 6. 研究発表 5：「後期旧石器時代前半期石器群の機能的考察」鹿又喜隆（東北大学）
 7. 講演：「東北日本の後期旧石器時代前半期の編年研究」佐藤宏之（東京大学）
 8. 資料検討会
- 12 月 19 日 (日)
9. 遺跡調査報告 1：「北海道北見市吉井沢遺跡」役重みゆき（東京大学）
 10. 遺跡調査報告 2：「山形県真室川町丸森 1 遺跡第 3 次発掘調査」村田弘之（東北大学）
 11. 遺跡調査報告 3：「山形県舟形町高倉山遺跡第 1 次発掘調査」佐野勝宏（東北大学）
 12. 遺跡調査報告 4：「福島県会津若松市笹山原 No.16 遺跡第 10 次発掘調査」会田容弘（郡山女子大学短期大学）
 13. 遺跡調査報告 5：「新潟県関川村荒川台遺跡第 11・12 次調査」阿部朝衛（帝京大学）

柳田会長からは前期旧石器捏造発覚 10 年を迎え、新たな決意をもとに健全な研究を推進することが表明された。

研究発表では、出穂氏は、現代人の拡散と文化的多様性について、グローバルな観点から、海外における 2000 年以降の研究を分かりやすくレビューした。そして、「地域」からどのような貢献ができるかという点を日本の課題として提起し、LGM のユーラシア大陸、とくに北東アジアに関する仮説が出された。石川氏は、秋田県の後期旧石器時代前半期の概要を述べると共にその編年的位置づけについて持論を展開された。これについては、会場から東北地方の型式学的な研究の有効性について疑義を呈する意見がだされた。神田氏は今年度すすめている地蔵田遺跡の再整理事業について、途中経過が報告された。当該遺跡は報告書が概報のみで、重要な遺跡であるにもかかわらずその全容が知られていないため、今回の報告書が期待される。秦氏は、珪質頁岩・玉髓質泥岩・玉髓・瑪瑙等について概要を説明し、山形県内での産地推定に関わるこれまでの研究成果をまとめたいうで、秋田県では玉髓質泥岩に大きな特徴があると指摘した。今後、日本



東北日本の旧石器文化を語る会秋田大会資料検討会の様子

海沿岸域における同様の石材が追跡できる可能性を示した。鹿又氏は、現在、継続的に進めている使用痕分析について、今回は前半期石器群のうち、台形様石器・ナイフ形石器に焦点を絞り、その形態と機能、用法に迫る研究の進捗状況を報告した。当該期石器群の使用痕分析事例は少ないため、今後の研究の進展が大いに期待されよう。以上の研究発表は内容が多岐にわたったため、統一的にまとめるということは叶わなかったが、出穂氏の発表を始め、当該地方では取り組まなければならない多くの課題があり、また、多様な観点から東北旧石器をまだまだ議論できることが参加者に認識されたと思う。佐藤氏の講演では、1992年の『日本旧石器文化の構造と進化』で提示され、その後の研究を決定づけている視座と理論、方法論等について改めて論じられた。当該書籍は刊行後20年近くが経っているが、講演はかみ砕いた表現で非常に分かりやすい内容であり、参加者からも好評だった。遺跡調査報告では、すべて大学機関を主体とした学術調査報告で占められた。どれも重要な遺跡の報告で、今後の継続調査に大きな期待が寄せられる。資料検討会では秋田県内の旧石器資料や今回の遺跡調査報告の資料、秦氏の石材サンプルなどを手にとって検討できた。

今回は時間的な余裕がなく、質疑応答での議論まで話が及びにくかったが、今後、東北の旧石器時代に関する議論の場を作る必要性を強く感じた。(吉川耕太郎)

おしらせ

研究グループ支援制度準備会について

本学会では、会員相互の情報交流と国内外における研究の推進に資するべく、研究グループ支援制度の設置を鋭意検討中です。同制度準備会は、会長、副会長、総務委員会、研究企画委員会からなり、役員と連携しながら制度に関する内規案の策定を現在進めています。同制度の骨子については、会員により組織された複数の研究グループを学会が公募し、学会予算の可能な範囲で運営費を一定期間支給する内容で検討されています。本学会は、研究グループの運営には関与しない方針ですが、成果公開などが義務となります。公募時期など詳細について検討を進め、改めて会員皆様に事前にお知らせする予定です。

広報委員会より

日本旧石器学会のホームページに新たなコンテンツが増えました。

従来、お知らせや会の組織に関する記載が中心でしたが、多くの皆様が読めるコンテンツをとということで、新たに「日本列島の旧石器時代遺跡」を開設いたしました。日本列島の代表的な旧石器時代遺跡について、一般にも

わかりやすく解説したコーナーです。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpra/sites/index.htm>

現在、岩宿遺跡(群馬)、矢出川遺跡(長野)、翠鳥園遺跡(大阪)、白滝遺跡群(北海道)などを掲載中ですが、実際に調査にあられた研究者などに執筆いただき、今後国内各地の旧石器遺跡を取り上げていく予定です。ぜひご覧ください。

また、日本旧石器学会のホームページでは、旧石器関係の研究会や講座・講演会などの催しについても、随時お知らせしております。

掲載情報がありましたら、広報委員会堤隆までご一報ください。たくさんの情報をお待ちしております!

(堤隆メール: jomon@mx2.avis.ne.jp)

会費納入のお願い

2010年度会費の納入をお願いします。また、2009年度以前の会費を納めていない方は、速やかに納入してください。会費納入は同封の郵便為替用紙でお願い致します。年会費5000円で、振込先は、日本旧石器学会郵便振替番号00180-8-408055です。

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願いいたします。事務局までメール等でご連絡ください。

編集後記

暖光を感じる時節となってきましたが、あわただしさも日々増していることと思います。さて、今号には6月に開催されるアジア旧石器協会日本大会のサーキュラーを掲載しました。参加登録や発表要旨原稿の締め切りが3月31日となっていますので、ご留意ください。(山)

日本旧石器学会ニュースレター

第16号

2011年2月28日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

谷和隆・山原敏朗・沖憲明

発行: 日本旧石器学会

事務局: 明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話: 03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp

HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpra/index.htm>